

生涯は鏡中に在り

—唐代の「鏡」の詩—

文学部 坂井多穂子

キーワード：唐代・詩・老い・鏡

はじめに

人が自分の姿を自分で見るには、鏡などの媒介物を必要とする。鏡を見ることは自分に対する関心と結びついた行為であり、その行為によって、容貌や形姿を確認するのである。鏡を見る行為を詠った詩（以下、「鏡」の詩とする）は、中国では六朝にあらわれ、次第に詩人の数も作品数も増加する。このことは、鏡に映る自分の顔を見つめる行為が、詩の題材として唐代、とりわけ中唐に至って普遍化したことを示していよう。とくに、中唐の白居易は、「鏡」の詩を四七首制作し（うち詩題にあらわれるもの九首）、ほかにも自分の「寫眞」（肖像画）を見つめる詩も六首（うち詩題にあらわれるもの五首）制作するなど、自分に対する関心を詩に表出したことで知られ、それについての先行研究も複数みられるⁱ。白居易は日常生活のなかで鏡をみつめている場面を好んで詩に描写したが、それらの「鏡」の詩のなかで自分の姿に見いだしたものは、ほとんどの場合、老いであった。具体的には、三二歳にして老いの徴候を見いだして恐れ、四〇代では白髪を忌むべきものにあらざとする開き直りと、老化への恐れをあいだで気持ちが揺れ動くが、五〇代には、「鏡を覽れば 頭白きと雖も、歌を聴けば 耳 未だ聾ならず」ⁱⁱや「兩鬢 蒼然たるも 心 浩然たり」ⁱⁱⁱのように、老化に抗する樂觀材料（白髪以外の、肉体と精神の健康）を見だし、さらに六〇代では「覽鏡喜老」詩のように、夭折を避け得た幸運を喜ぶにいたる。

しかし、鏡のなかに老いを見いだすのは、白居易に始まったことではなく、前時代の詩人たちにも、白居易ほどの作品数はないものの「鏡」の詩は散見する。にもかかわらず、白居易以外の「鏡」の詩にまで目配りした論考は管見では見られなかった。本論文では、中唐までの詩人たちが鏡に映る自分の姿に何を見ているのかを、とくに初唐の薛稷の「秋朝覽鏡」詩に注目しつつ考察する。

一、唐代以前の「鏡」の詩

従来、鏡は詩においても女性の小道具として捉えられていることが多い。たとえば、六朝の梁代に編纂された『玉臺新詠』（巻五）には、詠物詩において鏡を詩題に据えた高爽の詩「詠鏡」があるが、

初上鳳皇墀、 初めて鳳皇 墀に上り、
此鏡照蛾眉。 此の鏡 蛾眉を照らす。

言照常相守、言に常に相守るを照らし、
 不照常相思。常に相思うを照らさず。
 虚心會不采、虚心 會ず采らず、
 貞明空自欺。貞明 空しく自ら欺く。
 無言此故物^{iv}、言う無かれ此れ故物なりと、
 更復對新期。更に復た新期に對せん。

鏡を詠じながら、想う人を待ち続ける女の嘆きを詠っている。この鏡は詩人自身を映し出すものではない。艶詩の色濃い『玉臺新詠』に限らず、鏡は古来女性の身の回りの小道具の代表としてなまめかしさを伴って詩に詠み込まれることが多く、詩人が自分を映し出す小道具として鏡を詩のなかにとりこんでいる例は少ない。

詩人が鏡に映る自分の姿を見つめる詩を作るようになったのはいつ頃からであろうか。唐より前の詩にみられる用例は次のとおりである^v。()内は詩数。

先秦漢魏——(零)

六朝

劉宋——謝靈運 (二)

齊——謝朓 (三)

梁——江淹 (二)、劉孝綽 (一)、王筠 (一)

北齊——顏之推 (二)

北周——庾信 (二)

陳——孔範 (一)

隋——盧思道 (一)、周若水 (一)

『先秦漢魏晉南北朝詩』にみるかぎりでは、詩人が鏡に映る自分の顔を詩材に取り入れるのは六朝に入ってからだと思われる。

謝靈運の「鏡を撫す 華縑の鬢、帶を攬る 緩促の衿」(「晚出西射堂詩」)や謝朓の「時に孤鸞鏡を拂い、星鬢 參差なるを視る」(「詠風」詩)では、ごま塩頭を鏡に映しだしている。また、江淹の「鏡を擘りて 愁色を照らし、徒らに坐して 憂方を引く」(「侍始安王石頭城詩」)は、鏡に憂いの表情を映している。彼らのこのような視点は後世の詩人の「鏡」詩の一般的な傾向となる。詩人たちは往々にして鏡の自分の姿に白髪鶏皮——衰老を嘆くようになる。それがひとつの類型となってゆく。さりながら、六朝ではまだ鏡を見て老いや憂いを慨嘆する私的な行為はその詩の主要な要素とはなり得ていない。詩に「鏡」の語は出ていてもあくまでも中心に位置するのは自然描写などの、外的な要素である。

「鏡」の詩では、庾信の「擬詠懷二十七首 其二十」が六朝のみならず唐代の「鏡」の詩をとっても例外的な内容を詠っている。鏡の自分の顔に老いや憂い以外のもの——人相から運勢を占っている。「匣中取明鏡、披圖自照看。幸無侵餓理、差有犯兵欄」。庾信は鏡に自分の顔を映してみたところ、幸いにも餓死の相はないものの、戦争に巻き込まれる相を見だしている。この句は、周勃がある老婆に占ってもらったところ、いずれ宰相になるが九年後には餓死すると言われ、そのとおりになったという『史記』『周勃世家』の話をふ

まえている。ここで詩人の関心事が運勢に向けられているのは、庾信が生きた特異な時代環境にもよるだろう。彼はもともと梁のひとであるが、北魏に使いに行つてそのまま囚われの身となり、北周に仕えて故郷に帰ることなく生涯を終わった不遇の人である。この詩は、彼が実際に捕らえられてからの作である。同じ貴族社会に生きたとはいえ、謝靈運とは時代の様相を全く異にする。

二、唐代の「鏡」の詩

中唐までに見られる唐代の「鏡」の詩の用例数は次のとおりである。

初唐——宋之問（二）、沈佺期（二）、張説（三）、劉長卿（二）、

盛唐——李白（六）、岑参（二）、杜甫（六）

中唐——錢起（二）、顧況（二）、戴叔倫（三）、盧綸（三）、李益（三）、司空曙（二）、王建（四）、白居易（四七）、劉禹錫（二）、呂温（二）、孟郊（五）、李賀（二）、元稹（四）、牟融（二）、李紳（二）、鮑溶（二）・・・^{vi}

（一首のみの詩人は多数にのぼるので割愛した。なお、白居易と同時代人の韓愈には「鏡」の詩はない）

唐代に入ると、鏡に映る自分の顔を詠む詩人の数は俄然増えてくる。「鏡をみる」こと自体を詩のテーマとして詩題に掲げるようになったのは初唐の詩人に始まるようである。沈佺期の詩を次に挙げる。

「覽鏡」沈佺期

霏霏日搖蕙、 霏霏として 日 蕙を揺らし、
騷騷風灑蓮。 騷騷として 風 蓮を灑ぐ。
時芳固相奪、 時芳すら 固より相奪う、
俗態豈恆堅。 俗態 豈に恆に堅ならんや。
恍惚夜川裏、 恍惚たり 夜川の裏、
蹉跎朝鏡前。 蹉跎たり 朝鏡の前。
紅顏與壯志、 紅顏と壯志と、
太息此流年。 太息す 此の流年を。

厳しい日照りや風に美を損なわれる蕙や蓮を例に挙げて、このように美しい草花でさえ一時の命なのだから、自分のような俗物が永久に若い姿のままでいられるものか、と、鏡に映る顔を見ながら闊してきた年月を思い、ため息をつく。鏡に映っているものには「紅顏」も「壯志」もすでになく、老いさらばえたわが身である。鏡の顔に衰老を見て嘆くのは六朝の詩人たちととくに変わりはないが、「鏡を覽る」行為をとくに詩題に掲げることには端的に示されているように、作者の関心の中心はこの詩では鏡に映る老顏——衰老の嘆きにあるといえる。この沈佺期の場合、冒頭の自然描写は、自分の衰老を引き出す伏線に過ぎない。この詩の主題は鏡に映る自分の顔であり、従来なら詩の主題にもなり得ていた蕙

や蓮がここでは脇役に退けられている。

六朝においては自然描写などに重きが置かれ、鏡を見る行為は添え物であったが、唐代に入って、鏡を見る私的な行為も詩の中心的要素たりうると認識されるようになったのだと思われる。そのことは、鏡を詩に詠む詩人の増加とその詩数の増加にもあらわれている。

詩人が鏡のなかに見て詠みあげるものは、「紅顔」でも「壯志」でもなく、「流年」による老化であった。年若い詩人は鏡に映るおのれの「紅顔」「壯志」を詩に表出しない。老化の徴候を認めて初めて「鏡」の詩を作る。ではその「流年」を如何に表出するか。詩題に「鏡を覽る」と掲げる初唐の詩をもう一例挙げる。一例のみの詩人であるため、前出の唐詩人の用例表には挙げていないが、書画家として名高い薛稷の「秋朝覽鏡」詩である。

「秋朝覽鏡」薛稷

客心驚落木、 客心 落木に驚き、
夜坐聽秋風。 夜坐 秋風を聽く。
朝日看容鬢、 朝日 容鬢を看る、
生涯在鏡中。 生涯は 鏡中に在り。

「秋」は季節を指すが、作者が人生の秋にあることをも暗に示している。朝の明るい光のもとで「容鬢」（容貌と鬢の毛）を見んと鏡を覗くと、そこに映し出されたものは「容鬢」にとどまらず、なんとわが「生涯」であった。本詩は前出の沈佺期の詩と同様、「流年」（老化）に対する嘆きである。

結句については、三好達治が『新唐詩選』のなかで次のように述べる。「讀む人も同じく鏡中をのぞきこむような感があって、その感が異常に鮮明である。こういう鋭さを、私は『詩中の意外』というのである。語は數語に過ぎないが、讀んでここに到って、讀者の心は忽ち驚き、文字の不可思議作用から暫く眼を放つことができないのを覚えるではないか」^{vii}。結句の表現を「詩中の意外」、また「文字の不可思議作用」ともいい、絶賛を禁じ得ない。「生涯」の語は、もとは『莊子』「養生主篇」に出典をもつ^{viii}が、ここでは「生涯 半ばを過ぎんと欲す」^{ix}のように、生命、人生といった意味である。私の人生はこの鏡の中にある、との結句からは「流年」を直視した詩人の重い衝撃が感じられる。詩人は朝の身支度として何気なく鏡を覗いたのだが、そこに囚らずも過ぎていった年月の蓄積を認めて目が釘付けになる。もちろん今までおのれの年齢を知らなかったはずはないが、朝の明るい鏡によって如実に「流年」を映し出され、衝撃をもって老いを再確認せざるをえなかった。その衝撃を「生涯」の語に籠める。「流年」は万物に訪れる時間の経過であるが、「生涯」はその人固有の人生である。ややのちの高適が「生涯 重ねて陳べ難し」^xと詠うように、「生涯」はみずから「陳」べ語るものであるが、ここでは鏡という外物によって逆に思い知らされるところに「詩中の意外」がある。この結句は、かりに「流年在鏡中」と詠っても平仄は合うが、それでは年月の経過が鏡の中に映し出されるという凡庸な表現にとどまり、本来は映さぬものまで映されてしまったという「生涯」の語ほどの衝撃は生まれなかったであろう。

薛稷の詩は『全唐詩』巻九三に一四首収められるのみであるが、『新唐書』「藝文志四」には、「薛稷集三十卷」との記述がある。『唐才子傳』に伝はなく、『舊唐書』巻七三「薛

稷傳」によると、睿宗の時に中書侍郎となり、先天二（七一三）年、六五歳の時、太平公主と竇懷貞らの謀逆を知りながら報らせなかった罪で投獄され、死を賜ったという。この作品の制作時期は未詳であるが、おのれの悲劇的な最期をも予見しての「生涯在鏡中」ではないか、とさえ思えてくる。

この結句は、これよりのちの中唐の人、李益の「立秋前一日覽鏡」詩にも、「萬事銷身外、生涯在鏡中。唯將滿鬢雪、明日對秋風」と、全く同じ表現がみえる。「萬事 身外に銷え、生涯 鏡中に在り」。わが「身」をとりまく「萬事」は身辺から消え失せ、鏡の中に辿り来た人生が凝縮されている。白髪頭（「滿鬢雪」）の身一つで、明日の立秋には秋風に吹かれよう、という内容。薛稷の結句を借りて承句にもちい、起句の「身外」から「銷」えた「萬事」と、「鏡中」に「在」る「生涯」という対を構成している。いわゆる本歌取りであるから、薛稷の詩の衝撃には及ばない。

ここで『全唐詩』での「生涯在～」（生涯は～に在り）という用例を調べると、ほかには「生涯在王事」（沈佺期「餞高唐州詢」詩）、「大半生涯在釣船」（李咸用「題王處士山居」詩）、「牢落生涯在水鄉」（李咸用「旅館秋夕」詩）、「生涯在何處」（齊己「漁父」詩）の四例のみであった。これらはいずれも「ある場所（や仕事）で人生を過ごす」といった意味で用いられている。また、鏡に対象物（自分自身）が映っている様子を「在鏡」あるいは「在鏡中」と表現する用例も『全唐詩』には未見である。薛稷の「生涯在鏡中」の表現がいかに斬新であるかが分かる。

白居易とほぼ同時期を生きた、中唐の詩人王建は、「照鏡」という題の詩を、五言律詩と五言古詩（十二句）で各一首作っている。五律の「照鏡」詩を以下に挙げる。

「照鏡」王建

忽自見憔悴、	<small>たちま</small> 忽自ち憔悴を見、
壯年人亦疑。	壯年より 人も亦 疑う。
髮縁多病落、	髪は多病に縁りて落ち、
力爲不行衰。	力は不行が爲めに衰う。
暖手揉雙目、	手を暖めて 雙目を揉み、
看圖引四肢。	圖を看て 四肢を引く。
老來眞愛道、	老來 眞に道を愛するも、
所恨覺還遲。	恨む所 覺 還た遅し。

ふと鏡を見て、おのれの「憔悴」ぶりに着目する。「多病」と「不行」（修行不足）によって、「髪」や「力」は「落」ち「衰」えている。手を温めて霞む両目をもみほぐす。第六句「看圖引四肢」は、養生法を説明した図を見て、四肢を伸ばして実践する。年をとってから真剣に道教の修行にいそしんできたが、恨めしいことになかなかさとりを開けない、という内容。詩題に「照鏡」とあるが、鏡の前でおのれの姿を映している描写は前半四句のみであろう。後半は、鏡で確認した肉体の「憔悴」から回復せんとして、道教の修行に専念する様子を描く。鏡を見て老いを確認すると、手に持っていた鏡を離して修行に励む。

おのれの「憔悴」の原因を「多病」と「不行」に帰し、「道」（道教）の修行をすればいつか「覺」（さと）りにいたると信じている。王建は五古「照鏡」詩においても老病の我が身を鏡中に見て愁え、「白を揺らし 方 錯うこと多く、金を回らし 法 全からず」、すなわち「揺白」「回金」という煉丹術がうまくゆかぬことを嘆いている。なお、『唐才子傳』巻四「王建傳」には彼が煉丹術を好んだとの記述がないのは、年をとってから（「老來」）始めたためであろう。とまれ、王建は鏡に映る「憔悴」を確認するや（おそらく鏡を置き）、「道」の修行によって快復しようとする。ここには「生涯在鏡中」と食い入るように鏡をみつめた薛稷の姿勢はない。

おわりに

最後に、「鏡」の詩を六例作っている、盛唐の杜甫の例をみてみよう。次に挙げる詩は鏡を見ることが詩の主題ではないが、白居易の「鏡」の詩につながる日常性がうかがえる。

「早發」杜甫

濤翻黒蛟躍、 濤翻りて 黒蛟躍る、
日出黄霧映。 日出でて 黄霧映ず。
煩促瘴豈侵、 煩促 瘴 豈に侵さざらんや、
顔倚睡未醒。 顔倚 睡 未だ醒めず。
僕夫問盥櫛、 僕夫 盥櫛を問う、
暮顔覩青鏡。 暮顔 青鏡に覩たり。
隨意簪葛巾、 隨意 葛巾に簪たり、
仰慚林花盛。 仰ぎて慚ず 林花の盛んなるに。

朝早く、舟での旅立ち、舟中でうたたねをしている。そこへ、下僕が顔を洗ったかと尋ねてくるので、杜甫は老顔を恥じつつも鏡に映して身なりを整える。この二句では、鏡の顔を見る行為が日常生活の一コマとして表現されている。沈佺期の「蹉跎たり 朝鏡の前」の句からも想像をまじえれば読めなくもないが、杜甫の「下僕が顔を洗ったと尋ねる」の句は毎朝鏡を見ることが習慣化していたことをはっきりと示している。

杜甫以前の唐詩においては、鏡を見る行為からは日常生活の匂いがほとんど窺えなかった。これは謝靈運に代表される六朝の貴族詩人の影響なのかもしれない。杜甫にしても老顔を恥じている点では沈佺期らと変わりはないが、鏡を見る行為を日常生活の一コマとして詩の表現にとりこんでいる点に、従来の詩にはない新しい要素を見ることができる。

ⁱ 白居易の写真詩や鏡詩についての先行研究には、丸山茂「自照文学としての『白氏文集』——白居易の『写真』（肖像画）」（『日本大学人文科学研究紀要』通号三四 一九八七年）、澤崎久和「白居易の写真詩をめぐって」（『福井大学教育学部紀要』第一部 通号三九 一九九一年）、衣若芬 著・森岡ゆかり 訳「自己へのまなざし——白居易の写真詩と対

鏡詩』（『白居易研究年報』第七号 二〇〇六年）などがある。

ii 「秋寄微之二十韻」詩。白居易五四歳の作品。

iii 「贈蘇鍊師」詩。白居易五二歳の作品。

iv 中華書局の『玉臺新詠』（一九八五年出版）では「故此物」に作っているが、それでは文意がつながりにくいため、「此故物」に作る別のテキストに従った。

v 『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼欽立 輯校 共三冊 中華書局 一九八三年）による。具体的な詩題は次のとおり。

謝靈運「豫象行」「晚出西射堂詩」、謝朓「冬緒羈懷示蕭諮議虞田曹劉江二常侍詩」「移病還親屬詩」「詠風詩」、江淹「侍始安王石頭城詩」「臥疾怨別劉長史詩」、劉孝綽「歸沐呈任中丞昉詩」、王筠「和孔中丞雪裏梅花詩」、顏之推「神仙詩」「古意詩二首 其一」、庾信「擬詠懷二十七首 其二十」「塵鏡詩」、孔範「和陳王詠鏡詩」、盧思道「聽鳴蟬篇」、周若水「答江學士協詩」。

vi 『全唐詩』（共二五冊 中華書局 一九六〇年）による。具体的な詩題は次のとおり。

○初唐 宋之問「入瀧州江」「寄天臺司馬道士」、沈佺期「答魍魎代書寄家人」「覽鏡」、張說「酬崔光祿冬日述懷贈答 并序」「相州冬日早衙」「聞雨」、劉長卿「罪所留繫寄張十四」「酬滁州李十六使君見贈」。

○盛唐 李白「將進酒」「古風 其四」「秋浦歌十七首 其十五」「秋日鍊藥院鑷白髮贈元六兄林宗」「贈別舍人弟臺卿之江南」「覽鏡書懷」「草中有曰白頭翁者」、岑參「武威春暮聞宇文判官西使還已到晉昌」「巴南舟中思陸渾別業」、杜甫「早發」「蘇大侍御訪江浦賦八韻記異」「贈陳二補闕」「懷舊」「覽鏡呈柏中丞」「秋日荊南送石首薛明府辭滿告別奉寄薛尚書頌德敘懷裴然之作三十韻」。

○中唐 錢起「藍溪休沐寄趙八給事」「東城初陷與薛員外王補闕暝投南山佛寺」、顧況「夢後吟」「歲日作」、戴叔倫「暮春沐髮晦日書懷寄韋功曹諷李錄事從訓王少府純」「清明日送鄧芮二子還鄉」「將巡郴永途中作」、盧綸「酬李端長安寓居偶詠見寄」「雪謗後書事上皇甫大夫」「寄贈庫部王郎中」、李益「罷鏡」「照鏡」「立秋前一日覽鏡」、司空曙「閒園書事招暢當」「酬李端校書見贈」、王建「望行人」「照鏡」「照鏡」「長安別」、劉禹錫「磨鏡篇」「冬日晨興寄樂天」、呂溫「蕃中拘留歲餘迴至隴石先寄城中親故」「道州秋夜南樓卽事」、孟郊「寒溪」「春夜憶蕭子真」「答韓愈李親別因獻張徐州」「送無懷道士遊富春山水」「古離別二首 其二」、李賀「詠懷二首 其二」「勉愛行二首送小季之廬山」、元稹「酬樂天書懷見寄」「解秋十首 其一」「酬盧秘書 并序」「三兄以白角巾寄遺髮不勝冠因有感歎」、牟融「樓城叙別」「客中別」、李紳「趨翰苑遭誣搆四十六韻」「奉酬樂天立秋有懷見寄」、鮑溶「如見二毛」「舊鏡」。

vii 吉川幸次郎・三好達治著 岩波新書 一九五二年 第一九七頁

viii 「吾生也有涯、而知也無涯」。

ix 劉長卿「同姜濬題裴式微餘干東齋」詩（『全唐詩』卷一四九）。

x 「答侯少府」詩（『全唐詩』卷二一一）。